

Mothers' Awareness of the Developmental Process with Mental Retarded Infants

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): Infants with Mental Retardation, Mother's Awareness, Emotional Relationship between Mother and Child, Dousa-hou 作成者: 高橋, ゆう子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6349

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



知的障害を伴う幼児の発達的变化に関する 母親の気づき

高橋ゆう子
大妻女子大学家政学部児童学科

Mothers' Awareness of the Developmental Process with Mental Retarded Infants

Yuko Takahashi

Key Words: 知的障害を伴う幼児 (Infants with Mental Retardation), 母親の気づき (Mother's Awareness), 母子間の情緒的関係 (Emotional Relationship between Mother and Child), 動作法 (Dousa-hou)

要旨

本研究の目的は、幼児期における、母親の子どもの変化に対する気づきの特徴を明らかにすることである。援助者と子どもの身体を介した相互行為によって、母親の日常生活における子どもへの気づきがどのように促されたか、その特徴について分析を行った。分析にあたっては、報告された内容を、乳幼児精神発達質問紙を参考に発達の領域ごとに分類を行い、その特徴を検討した。また、エスノメソドロジーの手法を参考に、母親の説明づけの検討を行った。対象となったのは、知的障害を伴う幼児の母親 17 名の報告である。得られたエピソードを発達の各領域に分類したところ、“社会”が最も多く、“理解・言語”、“生活習慣”が続いた。母親の子どもの成長や発達として感じられたこと（説明づけ）は大きく、“母子間における相互交流”と“日常生活行動”に分類された。前者は、子どもの感情や気持ちに焦点をあてた内容が多く、後者は、子どもが試行錯誤する様子や自我の育ちを推測する内容が多かった。

以上を踏まえ、子どもの変化への気づきと母子関係の変化、援助者と子どもの身体を介した相互行為が、母子関係を支えるものとしていかに活用できるかについて考察した。

1 問題と目的

幼児期から児童期にかけて、発達の偏りや遅れが推測される子どもの相談を受けていると、子どもと多くの時間をともに過ごす母親の不安やとまどいが

打ち明けられることが少なくない。しかもそれらは、入園や就学など生活環境が変わることによってそれらの内容やありようも変化する。

知的障害が推測される場合は、発達の全般的な遅れが主な特徴となるが、知的障害を伴う自閉症、脳性まひのような場合、優先する診断名との関係で、さらにいくつかの特徴が挙げられることがある。それらの特徴をもとに、発達の領域ごとに具体的な援助が検討されるが、さまざまな領域から子どもの発達を促そうとすると、すべきこと、やった方がいいとされることが多くなり、結果的に母親にとって、子どもとの生活に余裕がなくなり、母子間の情緒的関係は不安定なことが懸念される。したがって、援助するにあたっては、発達の特徴、もしくは推測される診断名に基づいて援助技法や方法を検討するだけではなく、子どもと家族の生活や母子関係を前提として援助方法、もしくはその活用の仕方を工夫することが求められる。

乳幼児期においては、発達全体に加えて、子どもを取り巻く人々との関係や生活環境をアセスメントする必要があり、自然観察だけでなく、関わることによってどのように行動が変化するのか、という発達の最近接領域の評価が重要とされる（渋谷、2004）。障害児への発達援助として、針塚（2006）は、最も基本的なことは保護者への援助だといっても過言ではないとし、障害という診断の明確化に焦点を当てるのではなく、子どもが抱える困難や課題は発達的に変化する可能性があるという考えを保護者が持てるような援助が重要であるとする。このように周囲との関係性、関係システムの視点を踏まえるならば、日常生活の子どもとのやりとりの中で、

子どもの成長や発達として感じられたことに対する説明行為（南、1996）、いわゆる母親の気づきに着目することは、母子関係に対する心理的援助においても意味があると思われる。

本研究における目的は次の 2 つである。まず、幼児期における、母親の子どもの変化に対する気づきの特徴を明らかにすることである。日常生活の中で感じられたニーズ、もしくは発達アセスメントに基づいて行われる援助は、子どもの発達を促すことが主なねらいであるが、それによって母親の、日常生活における子どもへの気づきがどのように促されたか、その特徴について分析、検討を行う。次に、援助者と子どもの身体を介した相互行為が、母子関係を支えるものとしていかに活用できるかについて検討することである。ここでは動作法のいくつかの課題を用いて分析する。動作法で行われる援助者との身体的な相互交渉には、「触れること」、「動かすこと」、「見つめること」、「注意を共有すること」、「模倣すること」などの発達の重要な要因が備わっているとされ（森崎、2004）、乳幼児期における母子間の相互行為に極めて近いやりとりが援助者と子どもとの間で行われるため、母親の子どもとのかわりの参考となると考えられたからである。

II 方法

1. 対象者

初回面接時、就学前の 17 名の子どもの母親である。援助開始時の子どもの年齢と特徴、及び主訴は Table 1 の通りである。

2. 援助者との身体を介した相互行為としての動作課題

以下に今回、用いた動作課題の概要を示した（大野・村田、2003）。いずれも、援助者と子どもはアイコンタクトを取りながら子どもの身体部位に対して一緒に注意を向けたり、呼吸を合わせたりすることができるので、相互行為としてふさわしいと考えた。

(1) 仰向けになる

援助者の声がけや指示を聞いて、その場にいられることがねらいとなる。言い換えれば、子どもが自分を抑える練習といえる。あくまで子ども自身が自分の力で、起き上がりたい気持ちや興奮してくる自分の気持ちを静めてそれを保つ練習となる。まず、援助者は立っている子どもの肩に手のひらを当てて、声をかけながら座る方向にそっと押してみる。

子どもが押し返して来たら、それに合わせて手をわずかに引き、もう一度そっと押し返して数回繰り返す。子どもが押し返さなくなったら、「座って」と声をかけ、軽く肩を下方方向に押して待ち、座ったら「寝ましょう」と声をかけ、肩に当てた手を後方に引き気味に押さえて、自分から寝るのを待つ。仰向けになったら、援助者は上から子どもの肩を押さえ、補助者がいたら、両膝の上辺りに手を当てる。興奮して起き上がろうとしたり、膝を曲げたりしたら、肩や膝に当てている手を少し引くようにして受け止めてから、再び軽く押さえて返して待つ。このようなやりとりを 8 分程度繰り返して、仰向けの姿勢を保っていられるようになったら、肩と膝に当てている援助者の手の力を抜き、そっと手を離す。無理やり押さえつけてしまうと逆効果になってしまうので、待ちながらタイミングを図ることが重要となる。

(2) 軀幹をひねる

ねらいは、上体を自分でコントロールするとともに、自分の身体の動きに対して適切に注意を向けられるようにすることである。まず、横向きに寝た状態で、子どもの立てた腰を援助者の脚で挟むように押さえ、上体の肩を床の方向にゆっくり倒すように押してひねる。ひねる動きが止まったところで（不当緊張の出現）、わずかに子どもの肩を押し下げて、自分でその力を弛めるまで待つ。このとき押す力を弱めたり少し強めたりする等の工夫をして、子どもが自分で力を弛めやすくなるようにする。何度か途中で生じた不当緊張を弛めたら、肩と腕を軽く引き、子どもがゆっくり自分で上体を戻すように背中に触れながら誘導する。

(3) 腕をゆっくりあげる

援助者の声がけや指示に合わせて、方向や速さを調節しながら、ゆっくりした腕の動きをコントロールできようようにすることがねらいである。仰向けの状態で援助者は、肘を伸ばした子どもの腕を体側の少し内側を通るように、ゆっくり上げていく。子どもが、途中で動きを止めたり力を入れたりしたら、軽く押し返して子どもがその力を弛めるのを待つ。弛めたら、再び腕を上げていき、援助者の誘導に追随するようになれば、援助者の動かす力を次第に弱めて、子どもが自分で動かすように誘導は最小限にする。子どもの腕が耳の側を通り床に着いたら、ゆっくり腕を下げるように援助者が動かす。途中で、子どもが動きを止めたり反対方向に力を入れてきたりしたら、軽く腕を押し下げて子どもが弛める

Table 1 対象者の子どものプロフィール

No	対象者	援助開始時の子どもの年齢	特徴	主訴の内容
1	A	3:02	自閉傾向	多動傾向、コミュニケーションがうまく取れない、ことばの遅れ
2	B	2:11	知的障害	運動面、精神面の遅れ
3	C	3:11	知的障害	運動面、精神面の遅れ
4	D	5:08	知的障害	発達の遅れ、歩行が不安定
5	E	3:11	自閉傾向	自閉性のための言葉の遅れ、社会性の遅れ
6	F	3:06	知的障害	発達の遅れ、歩行が不安定
7	G	4:05	自閉傾向	友達と遊べない、対人関係
8	H	5:01	自閉傾向	遊び方が独特、身体の使い方に不安
9	I	5:00	知的障害	言葉の発達が遅く、身体の使い方がうまくない
10	J	2:02	知的障害	歩けない、離乳食が進まない
11	K	3:02	知的障害	発達の遅れ、言語全般
12	L	2:08	知的障害	落ち着きがない、乱暴
13	M	5:07	知的障害	多動傾向、発達の遅れ
14	N	4:06	自閉傾向	言葉でコミュニケーションがとれない、人の話が聞けない
15	O	4:02	知的障害	言葉の遅れ、発達の遅れ
16	P	2:01	自閉傾向	言葉が遅い
17	Q	2:04	知的障害	言葉が遅い、知的な成長が遅い

のを待つ。このようなやりとりを数回繰り返す。

3. 分析の対象となる資料

動作法を適用した 20 回分 (S1 ~ S20) までの記録を分析の対象とする。記録は、対象者 (母親) の報告を、短い文章にまとめたものである。動作法適用の頻度は、週に 1 回、もしくは 2 週に 1 回である。したがって、子どもの健康状態や家庭の事情等によって若干異なるが、6 ヶ月から 12 ヶ月間の記録となる。

毎回の面接において、母親は日常生活の中で気づいた子どもの変化、もしくは子どもの相談開始時に主訴として挙げられていた内容が、子どもとの日々のやりとりの中でどのように変化したか、などについて報告が求められた。ここでは、それらを母親の子どもの行動変容に関する説明づけを「母親の気づき」として見なした。報告された内容は、客観的な部分もあるが、母親の主観的な部分も、子どもの発達に関する期待や不安との関係の中で出てくるとも推測される。それは、母親自身の育児行為にも、

変化をもたらすことになるので、重要な母親の気づきとして分析の対象とした。

4. 資料の整理方法

先に述べた記録を、意味のまとまり (一つの内容を表す句、及び文) に区切り (報告されたエピソード数は 585)、まず、精神発達質問紙の発達のプロフィールに基づいて分類を試みた。それは、母親が捉えた子どもの変化が、発達のどの領域に関するものが多いのかなど、その特徴を検討するためである。分類した領域は、運動、探索、社会、生活習慣、理解・言語で、それぞれの領域にはさらにいくつかの段階が設定されているので、運動、探索、社会についてはそれらについても分類を行った。発達領域における段階の内容、及び特徴は Table 2 の通りである。生活習慣と理解・言語については、Table 2 を見てもわかるように乳児期特有の内容が少なくなく、対象者の捉えた変化内容にそぐわない部分が多かったため、報告されたエピソードの内容に基づき、生活習慣は、食事、排泄、生活習慣 (着

Table 2 発達の各領域における段階とその主な特徴

	領域	分類	No	発達の变化	具体的な特徴
1	運動		1	受動的な身体統制	おかれた位置でからだを適応させる段階
			2	積極的な身体統制	自分で直立姿勢を保ち、それに必要な体軀の統制がとれる段階
			3	移動の努力	積極的にからだを移動させようとする努力があらわれ、はいはいをしたり自分の姿勢を変化させる段階
			4	歩行のための協応動作	つかまりだちをしてから、2, 3 歩ひとりで歩くようになるまでの段階
			5	歩行の完成	歩くことや走ることが自由になる段階
			6	運動技能	物理的な障害物を克服して移動する段階
2	探索・操作		7	受動的な反応	外界の刺激に対して受動的に反応する段階
			8	有意的な操作	みたものを手を伸ばして、それをつかむことができるようになり、外界に有意的に統制するようになる段階
			9	外界探索	外界のものを自分で動かしてみることができ、自分の意志で外界を変化させることができるようになる段階
			10	探索的施行	いろいろな材料を、いろいろの方法で扱ってためしてみたり、事物の性質に適応して操作するようになる段階
			11	構成的な操作	事物を構成的に扱い、つくる段階
3	社会	おとなとの交渉	12	受動的な反応	大人があやすことに対して笑うというような、社会的な反応が出る段階
			13	差別的な反応	ふだん自分が世話してくれる特定の大人に対して差別的に反応する段階
			14	積極的なはたらきかけ	自分の欲求を満たすために、大人にやってもらおうという欲求が出てくる段階
			15	相互交渉	大人の意志を理解しはじめ、大人の意志に適した反応をする段階
			16	自己統制	自己の欲求や意志が明瞭に意識されるようになり、自分の欲することをやり通そうとする傾向が強まる段階
		子どもとの交渉	17	受動的な関係	積極的に他の子どもと関係を作るには至らない、子ども同士の関係の最初の段階
			18	積極的な交渉	子どもに対して積極的にはたらきかけ、ともに楽しむ相手としての友だちができる段階
4	食事・排泄・生活習慣	食事	19	受動的な吸孔	乳をさがして、顔を乳の方に向けてほしがる段階
			20	食器に対する適応	乳房や哺乳びんも外界の事物として、満足を与えてくれる源として、認知するようになる段階
			21	食事のための協応動作	食物を与えられるだけでは満足せず、自分で食物を獲得しようとする段階
			22	食事習慣	食事に伴う文化形態に対する適応が、重要な課題となる段階
		排泄	23	排泄習慣	自分で便所に行き、大便の後始末ができるようになる段階 (3 歳)
		生活習慣	24	生活習慣	食事、排泄以外で、靴の脱ぎ履き、洋服の着脱を一人でできるようにになる段階
5	理解・言語	理解	25	理解	特定の音声特定の事物と結びつくようになる段階 (10 ヶ月以降)
		言語	26	無意味発声期	泣くだけでなく、音声を発して、楽しむようになる段階
			27	はなしことばの発生	たんに単語を話すだけでなく、おとなのことばの調子をまねて話す段階
			28	言語生活の確立	言語の構造が複雑になっていくとともに、相手と適切な会話をかわすことが可能になる段階

脱や入浴)とその他に、理解・言語については、指さし、発声、単語や二語文、やりとりで分類した。

次に、エスノメソドロジーの手法を参考にして(菅原ら、2009)、意味のまとまりに区切った記録について、対象者が表現したことばをなるべくそのまま使って簡略化し、その内容を端的にあらわすラベルをつけた。さらに類似しているラベル同士を集めてグルーピングを行ない、カテゴリを作成した。Table 3 にエピソードとラベル、カテゴリの例を示す。上位のカテゴリにまとめる際には、ラベルだけでなく、エピソードの内容の確認を改めて行った。

III 結果と考察

1. 発達の領域から捉えた子どもの変化

方法で述べたように、得られたエピソードを発達の各領域に分類したところ、“運動”は 67、“探索・操作”は 62、“社会”は 240、“生活習慣”は 90、“理解・言語”は 117 であった。いずれにも当てはまらないものは 9 あったので、その他と分類した (Fig. 1)。これらの結果から、日常生活において母親が気づきやすい子どもの成長や変化は、“社会”や“理解・言語”の領域が多いことがわかる。日々の生活の中で行われるやりとりから、母親の子どもの変化に関する気づきが促されることが推測される。また、幼児期においては、基本的な生活習慣の確立は、重要な発達課題の一つになっているため、生活習慣に関する変化は気づきやすいとも考えられる。各領域の下位項目ごとにさらに分類を試みたところ、Fig. 2 から Fig. 6 のようになった。

“運動”の領域についてみると、歩行に関するものが最も多く、次に運動技能が続いた。乳幼児期においては、保護者がまず期待すること、子どもの成長を感じるの、子どもが歩けるようになることとされる(金子、1996)。したがって、主訴として挙げられることも少なくないと思われるが、そのような母親の不安や思いに、身体を介した援助技法が適合した結果と考えられる。次に“探索・操作”においては、構成的操作や探索的試行が多く挙げられた。“運動”の領域にも当てはまることであるが、乳児にみられる反応の、積極的身体統制や受動的反応は、身体的な発育もあり、分類されることは多くない。それに対して、これまでと異なるおもちゃなど、事物への興味や操作を試みる様子が、新たに子どもに見られるようになったことが気づきとして挙げられたと推測される。“生活習慣”の領域につい

ては、排泄、着脱、食事に関するエピソードが多く、エピソードの内容を見ると、排泄の感覚や衣服や食器などの対象の操作に関するものが多かった。発達の遅れが認められるという認識には、基本的な生活習慣が他の多くの子どもたちと比べて身につくのが遅いという事態が関係しており、それが母親の子どもの発達に関する不安に大きく影響していることが推測される。したがって、この領域の改善は母親の不安の軽減や生活のしやすさにつながるといえる。

“運動”“探索・操作”“生活習慣”の領域は他の多くの子どもたちと比べて遅れが顕著になりやすい反面、それらが改善されてくれば捉えやすいともいえるが、それに比べて変化がわかりにくいと思われる“社会”の領域についての報告が、今回は最も多かった。その中でも“大人との相互交渉”が半数以上を占め、自己統制がそれに続いた。これらの結果は、健常とされる子どもの発達との比較、相対的な評価ではなく、相談開始当初の子どもの様子と比較した報告、つまり個人内差に着目した結果であることが考えられた。また、“理解・言語”の領域においても、“指さし”や“単語や二語文”が多く、共に過ごす時間の多い母親が、子どもとのやりとりから実感しやすかった内容であるといえる。以上から、幼児期から児童期においては、“運動”“探索・操作”“生活習慣”の領域以上に、“社会”“理解・言語”の領域の変化が顕著であり、親子の相互交流が促されたことが推測された。

2. 子どもの変化に関する母親の気づき

方法で示した通り、ラベルからカテゴリの作成を試みたところ、大きく“相互交流”と“日常生活行動”に分類された。そして、いずれの大カテゴリにも含まれ、いずれのカテゴリに分類できると思われる小カテゴリが、“意志推測”、“自己主張”、“不安定さの改善”の 3 つあった。それらは、2 つの大カテゴリにまたがるものとして捉えることが適切と思われるので、Fig. 7 のように示した。

(1) 母子間における相互交流

母親が、日常生活の中で、子どもの変化に対してどのように気づくか、その主観的な特徴を捉えるため、ラベルを付ける前にエピソードの一部を切り取ってみた。今回の協力者は 17 名であったが、その切り取られた部分を整理してみると、同じようなフレーズが少なからず見られた。例えば、「感情を出す、表す (エピソード数 6、以下、6 のように略す)」、「表情が出る、引き締まる、豊かになる、

Table 3 主なカテゴリと報告されたエピソードの例

大カテ ゴリ	小カテ ゴリ	ラベル	定義	エピソード例	数
相互交流	ことは	単語や二語文	単語の発音が改善したり、状況に応じて増えた会話	・できると「できたあ、上手」と嬉しそうに言う。 ・父の帰宅が遅いと、「パパ、遅いねー」と言う。	34
		指さし	人とやりとりするときに、使われるようになった指さし	・絵本を指さし、母に向かって発声、母が言うまで繰り返す。 ・「おめめ」と父が言う、「めめ」と自分の目を指さす。	14
		発声	単語までではないが、人とのやりとりに活用されるようになった発声	・返事の仕方が変わり、「ハイ」とゆっくり手を挙げられる。 ・父が電話で話すまねをして、最後に「じゃあ」と言った。	30
	感情の現れ方	感情表出	“嬉しそうに”“感情を出す”“悲しそうに泣く”など、気持ちを推測する表現	・父が帰宅すると嬉しそうにジャンプする。 ・喜怒哀楽がはっきりしてきて、母と手遊びをしていると楽しそう。「感情があるんだな」と思った。	51
		視線の共有	何かするときに母親を見るなど、目が合うようになったこと	・動きに筋道ができてきた感じ。 ・母の顔を見て要求の仕方を変えたりする。 ・身体を傾けて「ねー」と言いながら、母を見て相槌を打つしぐさ。	15
	やりとり	協調	家族や友だちに合わせて動けるようになったこと	・母の歩調に合わせて歩けるようになる。 ・父がだっこして歌っているとき、父と同じように首を振った。	17
		応答	言われたことに答えたり、指示の通りがよかったこと	・動物園で「象、見に行こうね」というと「象、いないね」と探した。 ・やりたくないことを促されると、「やらない」「いらない」と言う。 ・物を叩いて「うるさいよ」と言われたら、軽く叩く。	45
		要求・甘え	甘えたり、おんぶを要求したりするようになったこと	・外に出かけたくて、母のバックと鍵を持つてくる。 ・だっこしたとき、父の首に手を回し、べたっと寄りかかってきた。	27
		模倣	家族や友だちのまねをするようになったこと	・テレビと母を交互に見てまねして歌う。 ・よく口を動かし、母が舌を出すと、まねするようになる。	17
	日常生活行動	意志推測	「自分でやろうとする」など、子どもの様子から意思を推測しやすくなったこと	・「トイレ行く？」と聞くと、トイレを指して行くようになった。 ・ズボンに足を通して、自分で手で引っ張ろうとする。 ・着替えるとき、ボタンはめをけっこう辛抱強くやる。	52
		自己主張	主張するような行動をとったり、できることをアピールしたりすること	・兄と喧嘩するようになった。読んでいる本を取ったり、真似したり。 ・おしっこをオマルでしたとき、「見て」と言いに来た。 ・靴下を履くのが早くなり、ずれても直して「履けたよ」と言う。	51
		落ち着き	母親の傍にいたり、じっとしてられるようになったこと	・パン屋で「ママの傍にいてね」と言う、脇にくっついてた。 ・家で無目的に動くことが少なくなる。 ・エレベーターなどの好きなものに、すぐには近づかなくなる。 ・床屋で、祖父の膝の座って10分くらいじっとしていられた。	30
		不安定さの改善	パニックが変わり、柔軟さが見られたこと	・かんしゃくを起こしたり、泣き叫ぶことが減った。 ・パズルで母が手を出しても、パニックにならず、やり直す。 ・自己主張が出てきて「いやだ」と言うが、交換条件で聞き入れられるときが出てきた。	26
日常生活行動		動作改善	うまくできなかったことが改善したこと	・以前ほど、ご飯をこぼさなくなる。自分でお椀に身体を近づけたり、引き寄せたりする。 ・スプーンやフォークを使うとき、手首を返せるようになった。	48
		動作獲得	新たにできるようになったこと	・パジャマを初めて一人で脱げた。 ・初めてトイレでおしっこをした。	14
		動作や姿勢の安定	安定さが増したこと	・テレビを見ているときの姿勢がよくなり、背筋が伸びている。 ・立って排尿することができるようになった。 ・手を引かれなくて歩けるようになる。	25
		適度緊張	うまく力が入れられ、持続できるようになったこと	・オマルで排便するようになり、踏ん張るようになった。 ・腰回りがしっかりしてきて、股下を覗くような動作をする。	14
		手の巧緻性	手先の不器用さが改善したこと	・おもちゃの電話のダイヤルを回せるようになった。 ・はさみの使い方が上手になった。 ・物を投げたりせずに、そっと置けるようになる。	17
		身体への気づき	意識されにくかった身体部位への気づき	・口を大きく開けてみたり、鏡で見て舌を出したりする。 ・自分の手足の指を動かしてみ、「ママ」と呼んで見せる。	6
	遊び	主訴の変容	問題となっていたことやこだわりが変化	・なんでも臭いのかぐ仕草が減ってきた。 ・ぼっとしていることが少なくなる。	22
		遊び方	おもちゃへの興味	・これまで触れなかったハーモニカに興味を示し、吹いてみる。 ・これまで使わなかったおもちゃを出して遊ぶ。	8
			ごっこ遊び・見立て遊び	・人形を動かしながら何か言っているし、姉とおまごとする。 ・ぬいぐるみをカゴに乗せて買い物をするような遊びをする。	6
			遊びの持続	・一つの遊びが長く続くようになった。	5
描画	描画	・グルグル描きの円が閉じるようになった。 ・ぬりえが枠をはみ出さなくなった。	11		
計					585

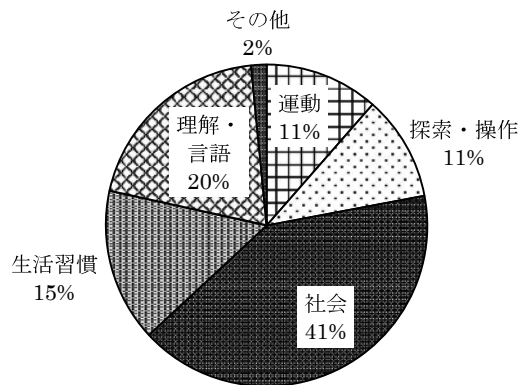


Fig. 1 日常生活における行動の変化 N=585

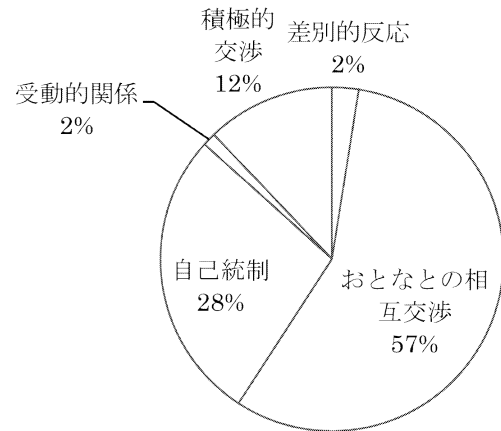


Fig. 4 “社会” 領域の変化内容 N=240

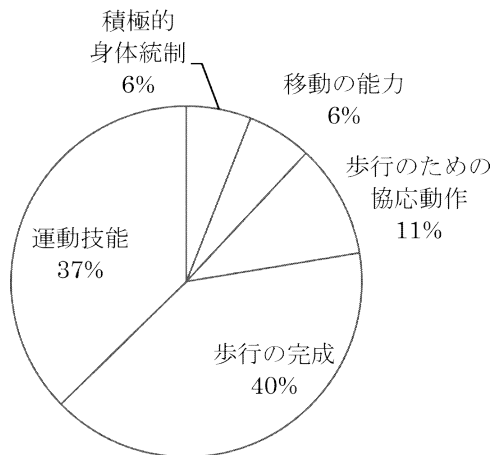


Fig. 2 “運動” 領域の変化内容 N=67

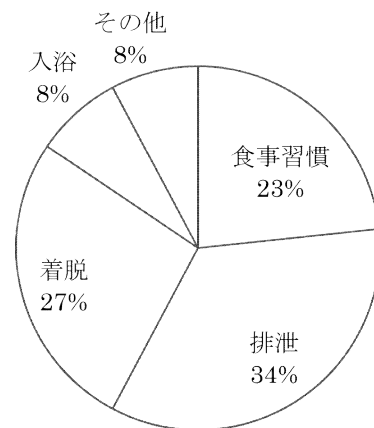


Fig. 5 “生活習慣” 領域の変化内容 N=90

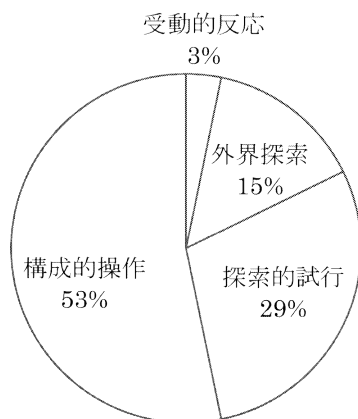


Fig. 3 “探索・操作” 領域の変化内容 N=62

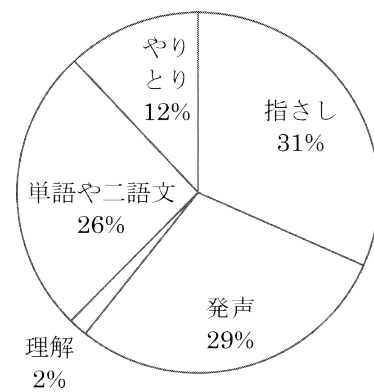


Fig. 6 “理解・言語” 領域の変化内容 N=117

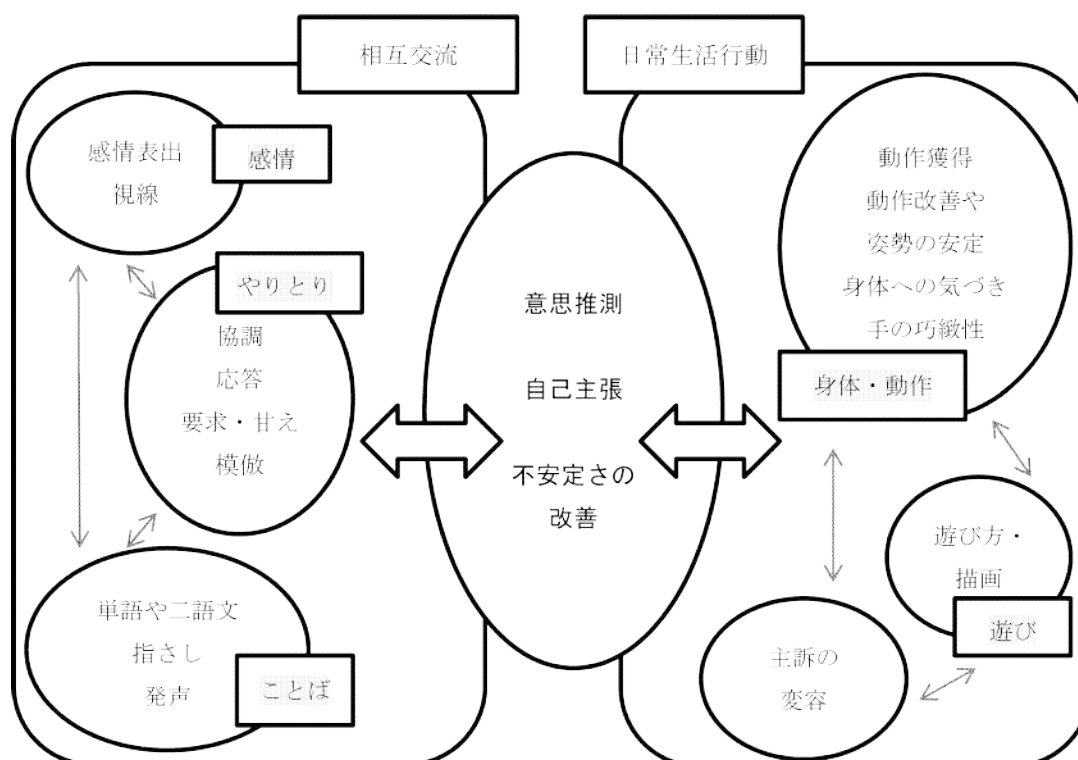


Fig. 7 子どもの変化に関する母親の気づき

(6)、「うれしそうに (4)」、「わざとやる・いたずらをする (10)」、「兄弟とおもちゃの取り合い (7)」、「目を見て、目があう、母を見て (11)」、「母のそばに (4)」などが多く見られた。それらの内容をみると、子どもができるようになった内容と合わせて、「意思表示がはっきりしてきた」「ほめてもらおうとする」「べたっと抱きついてきて甘えるようになる」「自分から手をつなごうとする」「一緒ににこにこする」「いたずらをして注意を引こうとする」など、子どもの感情や気持ちに焦点をあてたものが多いことに注目できる。さらに、「泣く」ことについては、最初は、否定的な感情を伴いがちだったが、泣き方のわずかな変化に気づけるようになると、それらを子どもの感情表現の一つと捉えるようなエピソードが見られた。それらは、母親として、子どもの多様な変化を受け止められる幅が広がったといえ、そのプロセスにおいて母親と子どもとの心理的な距離が縮まり、情緒の関係が深まったことが推測された。

(2) 日常生活行動

日常生活行動の場合、「できるようになった」ことが子どもの変化への気づきとして報告されやすい

と思われるが、エピソードを見ていると、子どもとの取り組みに着目する、もしくは子どもの行動に意思を読み取る内容が多いことがわかった。具体的には、結果的にうまくできなかったとしても、排泄のとき「教えられるようになった」や「トイレで踏ん張れるようになった」、食事のときも「こぼしにくくなる」、「そっとお皿を置いた」など、わずかな変化に気づきが生じたといえる。さらには「自分で」「一人で」のように、子どもが試行錯誤する様子、「泣いても（長引かない、引きずらない）」など、子どもの気持ちの揺れや自我の育ちを推測する内容が少なくなく、“できる” “できない” という行動上の変化だけではなく、子どもの心理的な成長や感情に関する気づきが促されたことがわかる。

IV 全体的考察

1. 子どもの変化への気づきと母子関係の変化

村瀬 (2003) は、子どもの様子をよく観察し、必要とすることに呼吸を合わせながら応えていくことが、今日の母親には苦手とする人が多いため、子ど

もの心理臨床においては、家族へのアプローチが不可欠であることを指摘する。今回、母親の子どもの変化への気づきを分析、検討した結果、日常生活におけるやりとりのプロセスに着目することで、母親は子どもの気持ちを推測しやすくなり、客観的に「できた」とはいえなくても試行錯誤する様子を成長と感知することが明らかとなった。具体的には、意思の推測や自己主張が挙げられたが、これらは、子どもが取り組む、もしくは子どもとやりとりするプロセスに着目することにもなる。例えば、これまであまり感じられなかった子どもの意思、自我のものを、子どもとの相互交流や子どもの行動から推測したり、不安定さの改善を実感できたりするようになると、子育ての難しさが軽減されることが推測された。難しさが軽減していくと、「できない」からすぐ手を貸すというよりも、子どもが「やろうとしている」姿を見守る姿勢が少しずつ、備わってくると思われる。生活する上で、一人でできることが増えるのは発達上、好ましいことであるが、一方で、子ども自身の試行錯誤するプロセスも重要である。このように母親が、子どものわずかな変化に着目できるようになることによって、子どもにとって適切な環境を調整しやすくなり、結果的に、子どもの力を引き出されることになると考えられる。そしてそれらの気づきは、南（1996）が指摘するように、子どもに対する母親自身の実践行為を方向づける指針や日常の困った事態に対する説明、納得の様式になるので、その後の子どもへの関わりや安定的な情緒関係に影響することが推測される。

麻生（2003）は知的障害のある子どもの場合、発達が緩やかなために、発達を実感されにくい状況にあるという。そして例えば、トイレに行くこと、食事をする事の中にもさまざまな「他者の意図」が入り込んでいるので、「自己の意図」と「他者の意図」とが調整しあうバランスをとることが必要となることを指摘する。「他者の意図」とは、母親の期待を含んだ予想や、こうなってほしいという思いなどと言い換えることができるだろう。

このように、一般的に言われている子どもの発達にとって好ましい行動や発達段階を意識するより、その都度、子どもとのやりとりの中で生じた主観的な体験を元に、関わりを持てるようになることが基本的な情緒関係の形成においては重要と思われる。安定した情緒関係は、乳幼児期の発達段階に相当するものであり、その後の発達にも影響を及ぼすことが考えられる。

2. 援助者と子どもの身体を介した相互行為が母子関係に及ぼす影響

知的障害が推測される場合、発達の遅れがその特徴として述べられることが多く、発達援助を検討する際には、遅れを取り戻す、もしくはスムーズに生活が送れるように、繰り返し練習を行い、基本的な生活習慣等が早く定着することが求められる。おそらく一つのことができるようになると、次の課題に向けて反復練習が開始されることになり、それがスムーズに進まなければ、遅れの所以であるというような認識が就学前後においては家族内で固定化される可能性がある（Andolfi, 1977）。今回、身体を介した相互行為を通して、基本的な生活習慣や行動の改善が認められたが、そのような変容には、動作獲得、動作改善や姿勢の安定、子どもの身体への気づき、手の巧緻性など、子どもの身体・動作に関する母親の気づきが関連していると考えられた。

援助は、子どもの発達を促すことがねらい、換言すれば子どもの問題になりがちなこと、困難なことを改善することが目的となる。それが特定の場面で、特定の人の間で「できなかったこと」が「できる」ようになれば、他のいろいろな日常場面でも「できる」ようになることが期待されるが、母子関係や家族関係の安定を意識して活用することが肝要だろう。団（2013）は家族療法では、何が起きていたのか事件（出来事、症状）としてではなく、仕組み（システム）として理解し、どのようであったら、同様のことが繰り返される可能性が減るかを正しく認識することが大切であるとするが、知的障害を伴う子どもがいる家族についても同様のことがいえるだろう。援助を行うことは、援助者が母子関係システムに介入することであり、これまでの関係のあり方に、少なからず変化をもたらす。具体的には母親が、援助者と子どもとのやりとりを間近に見たり、そこに母親自身も参加、関与したりすることで、援助者の関わり方がひとつのモデルとなり、さらに子どもの発達や個性に関して以前と違った見方や捉え方ができるようになる。今回、行った子どもとの身体を介した相互行為は、母親に、子どもへの働きかけについて新たな視点を提供するきっかけとなり、結果的に母子関係に変化をもたらすひとつの要素になることが推測された。

Forgel（1993）は、乳幼児と母親の関係における相互交流について取り上げ、その中でもコ・レギュレーション（共同調整）について言及している。それは、日常生活における何気ないやりとりの中で、

母親が変化を加えるなどして、新奇性をもたせ、子どももそれに調整しながら加わってくるようなやりとりだが、それらは予定されているものではなく、偶発的に起きるようなもので、母親の機転や気づきがきっかけとなることを重要視する。だからこそ、子どもにとって意味があることが強調されているが、そのようなやりとりは、知的障害を伴う子どもにとっても重要である。Rogoff (1990) は、文化人類学的な視点から親子関係における Guided participation Relationship (導かれた参加) の重要性を強調したが、知的障害を伴う子どもをもつ母親にとっても、母親自身がガイドとなって子どもを誘い、導いていくというプロセスはもっと検討される必要があり、今後の検討課題としたい。

文献

- Andolfi, M. (1977) An Interactional Approach, Casa Editrice Asrolabio-Ubalchini Editore, 石川 元訳 (1994) 精神医療における家族療法, 星和書店.
- 麻生 武 (2003) ことばの背景としてのからだ, 麻生武・浜田寿美男編, からだとことばをつなぐもの, ミネルヴァ書房.
- Fogel, A. (1993) Developing through Relationships, origins of communication, self, and culture, The

- university of Chicago press.
- 針塚 進 (2006) 保護者への援助ーカウンセリング, 心理教育, コミュニティ, 臨床心理学, Vol. 6, No. 6, 823-828.
- 金子明友 (1996) スポーツと子ども, 東洋・小澤俊夫・宮下孝広編, 児童文化入門, 岩波書店.
- 南 博文 (1996) エスノメソドロジー: 自明な正解の解剖学, 浜田寿美男編, 発達の理論: 明日への系譜, ミネルヴァ書房.
- 村瀬喜代子 (2003) 統合的心理療法の考え方, 心理療法の基礎となるもの, 金剛出版.
- 大野清志・村田 茂 (2003) 動作法ハンドブック応用編: 行動問題, 心の健康, スポーツへの技法適用, 慶應義塾大学出版会.
- 渋谷登美子 (2004) 発達障害と心理臨床, 十島雅蔵編, 福祉臨床心理学, ナカニシヤ出版.
- 菅野幸恵・岡本依子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田 学・東海林麗香・高橋千枝・八木下 (川田) 暁子 (2009) 母親は子どもへの不快感情をどのように説明するか: 第 1 子誕生後 2 年間の縦断的研究から, 発達心理学研究, Vol. 20, No. 1, 74-85.
- 団 士郎 (2013) 対人援助職のための家族理解入門: 家族の構造理論を活かす, 中央法規.
- Rogoff, A. (1990) Apprenticeship in Thinking: cognitive development in social context, New York: Oxford University Press.

Summary

This paper aims at characterizing mothers' awareness of developmental processes with their mentally retarded infants, through their reports about their children with somatic interaction between therapist and child (Dohsa-hou), and considering the effect of the method for supporting the relationship between mother and child. Five hundred eighty five episodes of mothers' awareness were extracted from seventeen mothers' reports during twenty sessions. They were analyzed from two viewpoints. One was the domains of the developmental test and focused on the content of their awareness. The other was narrative accounts and focused on how to understand their child. In the domains of the developmental test, the most numerous are first, "Sociality" and second, "Language". In reference to their narrative accounts, the largest categories were "Interaction with their child" and "Daily Actions". It was notable that "Sociality" and "Language" in the domains of the developmental test supported the category "Interaction with their child". The mothers became aware of small changes in their child's actions during somatic interaction between therapist and their child and could guess their child's thinking through the process of "Daily Actions". The mothers' awareness has the possibility of stabilizing the basic emotional relationship between mother and child. The results suggested that somatic interaction between therapist and child could improve the basic relationship between them and also empower parents.